

The Dual Aesthetics in the Villa Lante at Bagnaia

—*Bellezza and Grazia* in Mid-Sixteenth-Century Italy—

Noriko Kotani

バニャイアのヴィラ・ランテ

—16世紀中期イタリアのベレッツァとグラツィア—

小 谷 訓 子

本稿は、ローマから65キロメートル東北のバニャイアに造営されたヴィラ・ランテの庭園芸術の様式と構造に関する問題点を取り上げ、そこに表現された二つの美の概念：ベレッツァとグラツィアについて述べることを目的とする。庭園芸術は、専門用語の曖昧な定義の問題や、時間的経過の中での形態変化の問題などを内包し、常にその特異性が強調されるため、他の造形芸術と一線を画してきた。しかしながら、いかに他の造形芸術から異なったものであろうとも、同じ視覚文化に属する以上、庭園芸術も、その地域でその時代に育成された慣習と美学を以て制作されたものに他ならない。従って、ここでは、庭園芸術も特定の地域に育った特定の時代の視覚文化を表すという前提で、ヴィラ・ランテを、16世紀中頃のイタリア中部における特有の美学の文脈の中で解釈していく。

考察の手順としてまずは、現存する三つの複製：パラッツィーナ・ガンバラのフレスコ画、タルキニオ・リグストリの1596年の版画、ジョヴァンニ・グエラの素描を手掛かりに、ヴィラ・ランテに内在する二元的な構造と、庭園の名所の所在を明らかにする。その際、

先行研究についても述べ、1970年代から1990年代にかけてのクラウディア・ラッツァロの研究業績を主とした既存のイコノロジー的解釈における限界と問題点を指摘する。次いで、16世紀中頃におけるベレッツァとグラツィアの概念の定義について論じるのだが、それは、ベネデット・ヴァルキのリプロ・デッラ・ベルタ・エ・グラツィア（1590）に詳細にわたって説明されているので、主としてこれを参照するものとする。ここでは、アルベルティやヴァザーリ、バルダサーレ・カスティリオーネらの著述も検証しながら、ベレッツァとグラツィアの定義がルネサンス期においてどのような変遷を経るのかを考察した上で、ヴィラ・ランテの様式的な特徴と二つの美の概念との関連を分析していく。また、制作当時の社会的な背景として、ヴィラ・ランテのパトロン、ジャンフランチェスコ・ガンバラ枢機卿の交友関係、彼とフィレンツェのリテラッティとの繋がりについても述べ、ヴィラ・ランテがベレッツァとグラツィアを体現するという拙論の妥当性を強調する。